

令和元年 9月

榊原 文 学位論文審査要旨

主 査 兼 子 幸 一
副主査 黒 沢 洋 一
同 尾 崎 米 厚

主論文

Association between mothers' problematic Internet use and maternal recognition of child abuse

(母親の問題のあるインターネット使用と母親の児童虐待認識との関連)

(著者：榊原文、芳我ちより、金城文、尾崎米厚)

令和元年 Child Abuse & Neglect 掲載予定

参考論文

1. ソーシャル・キャピタルと産後うつ有病率との関連-都道府県単位の生態学的研究-

(著者：榊原文、濱野強、篠原亮次、秋山有佳、中川昭生、山縣然太郎、尾崎米厚)

平成29年 厚生指標 64巻 21頁～27頁

2. 生後3-4か月の子どもを持つ母親の育児困難感とソーシャル・キャピタルとの関連-都道府県単位の生態学的研究-

(著者：榊原文、濱野強、篠原亮次、秋山有佳、中川昭生、山縣然太郎、尾崎米厚)

平成30年 厚生指標 65巻 15頁～21頁

学 位 論 文 要 旨

Association between mothers' problematic Internet use and maternal recognition of child abuse

(母親の問題のあるインターネット使用と母親の児童虐待認識との関連)

近年、インターネット（ネット）アクセスは急速に増加しており、生活の質を向上させている。一方で、ネット使用を制御できず、人間関係や社会生活に悪影響を及ぼす問題のあるネット使用（PIU）が問題視されている。Young KS(1996)のケースレポートでは、PIUの母親は、ネットに没頭するあまり、家事をしなくなり、子どもに対してネグレクトの状態になったことが示されている。母親のPIUに焦点をあてた研究は乏しいが、いくつかの論文では、母親のPIUが子どもの睡眠問題や情緒・行動面の困難さに影響することや、負の育児感情と関連することが明らかにされている。

PIUは敵意や攻撃性と関連することが明らかにされており、PIUの母親による攻撃性が子どもに向けられると、子どもを暴行するといった身体的虐待や暴言を吐くといった心理的虐待が危惧される。しかし、先行研究では、母親のPIUが子どもへの虐待に関連するののかについて明らかにされていない。

そこで本研究は、母親のPIUと虐待認識との関連を明らかにすることを目的とした。

方 法

2016年度に島根県松江市で実施された4か月、1歳6か月、3歳の各健診結果と母親のPIUの有無を判定するYoung's Diagnostic Questionnaire for Internet Addiction score (YDQ)の結果をリンクさせ、連結不可能匿名化した状態で、松江市よりデータ提供を受けた。虐待のリスクが高い多胎児、母親の精神障害や発達障害等で子どもを養育できず乳児院に入所している児、YDQ記入者が母親以外の場合のデータを除外し、4か月1,685人、1歳6か月1,729人、3歳1,674人を分析対象とした。

母親の虐待認識は、乳幼児健診の間診項目である「子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」に基づき、「はい」と回答している場合を虐待認識ありと評価した。虐待認識の有無を従属変数、母親のPIU (YDQ \geq 5)の有無を独立変数、母親の出産年齢、子どもの数、昼間の保育者、育児の支援者の有無、両親の喫煙の有無、産後うつの有無を共変量として、年齢別にロジスティック回帰分析を行った。また、虐待認識と虐待行為と

の関連を捉えるため、虐待認識を従属変数、問診項目の「子どもに手をあげることがあるか?」「子どもを怒ってばかりいるか? (1歳6か月、3歳健診のみ)」「子育てを投げ出したくなることがあるか?」の回答を独立変数として、単変量ロジスティック回帰分析を行った。

本研究の実施にあたり、島根大学医学部医の倫理委員会の承認を受けた(承認番号:2519)。

結 果

YDQ \geq 5の割合は4か月児の母親1.1%、1歳6か月児の母親1.4%、3歳児の母親1.0%であった。虐待認識ありの割合は4か月児の母親0.7%、1歳6か月児の母親1.4%、3歳児の母親2.1%であった。「子どもに手をあげることがあるか?」「子どもを怒ってばかりいるか?」「子育てを投げ出したくなることがあるか?」に「はい」と回答した母親は、そうでない母親と比較して、有意に虐待を認識していた。また、4か月、1歳6か月、3歳を持つ母親のPIUと虐待認識は有意に関連していた。調整オッズ比 (OR) は、それぞれ13.30 (95%信頼区間[CI] : 1.26~139.98) 、7.02 (95%CI : 1.28~38.55) 、28.06 (95%CI : 2.48~317.93) であった。

考 察

PIUの母親は、そうでない母親と比較して、約10~30倍虐待を認識していることが示唆された。その理由として、母親がネットに夢中になるあまり、ネグレクトの状態になっている可能性が考えられる。また、子どもに手をあげる、怒ってばかりと回答した母親は、そうでない母親と比較して、有意に虐待を認識していたことから、虐待認識のある母親に虐待行為があると仮定した場合、ネット使用を養育のために中断されることがストレスとなり、子どもに攻撃的になることが、虐待認識につながるメカニズムとして推察される。

逆に、PIUは、無力感や不安感等の不快な感情や対人的な困難から逃れるためにネットを過剰に使用することで生じるとの指摘があり、母親の虐待認識と育児不安との関連性も明らかにされていることから、育児不安や育児負担を解消するためにネットを使い過ぎることでPIUの状態になっている可能性もある。本研究においても、子育てを投げ出したいと答えた母親は、そうでない母親と比較して、有意に虐待を認識していた。不安や負担の解消としてのネット利用は対処方法となりうるが、不安によるネットの使いすぎはPIUになる恐れがあるため、使い過ぎには注意が必要である。

結 論

母親がPIUの場合、そうでない母親と比較して、約10~30倍虐待を認識していることが示唆された。